

# 鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ

⑧

## 2 度目の韓国 鬼探しの旅

「初めての韓国への旅」で「下見」をして半年後の 2004 年 3 月、ワールド航空旅行サービスのツアー「飛鳥への道・百済の古都探訪の旅」に妻と参加しました。

この旅行社は、新聞広告はほとんど出さず、口コミで繁盛し、リピーターに支持されており、新しい観光地とルートを次々に開発するユニークさで有名です。

当時の韓国旅行といえば、ソウル中心の上っ面だけの観光で土産店にやたら連れて行かれる「買い物ツアー」が多かったのですが、その中で「歴史をじっくり」足で確かめ、扶余や全州の博物館に寄るだけでなく、学者・専門家の講義もあるというのが気に入りました。

### 百済初期の都・夢村土城

朝鮮半島北部に興った高句麗に続き、346 年ごろ朝鮮半島南部を中心に興ったのが百済（くだら・ペッジェ）でした。古代日本の歴史に一番大きな影響を与えたのが百済でしょうから、まず百済を学び、次に新羅（シルラ）の古都・慶州（キョンジュ）に行こうというのが、私の鬼探し計画でした。



弥勒菩薩半跏思惟像レプリカ（ソウル・夢村土城博物館）

成田から大韓航空でソウルへ。ソウル郊外の初期百済の都城跡にある夢村土城（モンチョントソン）博物館（百済の歴史を展示）を見学。京都・広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像（603 年に百済から伝来とされる）のレプリカが迎えて

前橋市 富山 弘毅

れて、日本との距離がいきなり縮まりました。鬼瓦の展示はありませんでした。

バスで大田（デジョン）郊外の儒城（ユソン）温泉のホテルへ。

### 百済の古都・公州

2 日目はまず、百済の古都・公州（コンジュ）の公山城（コンサンソン）城址を歩きました。百済は高句麗に追われて、ソウル近郊の漢山城から公州へ、そして扶余（プヨ）（扶蘇山城）へと遷都しました。

古そうに見える建物はありました。でもガイドの話では「公州、全州には三国時代（AD.1C～BC.7C 高句麗・百済・新羅が鼎立）までの建物はひとつも残っていない。木造では高麗王朝（12C）が最古です」。



甲寺 石塀=門の鬼瓦

なぜかと尋ねて、初めて「甲寺（カブサ）も秀吉の日本軍によってすべて焼かれた」と説明してくれました。観光名所の鷄龍山甲寺は百済時代の古寺として知られるますが、1604 年に再建されたものです。

新元寺も名刹です。碧水禅に鬼がいましたが、前回紹介した通度寺（トンドサ）や

阜蘭寺（コランサ）にあった栗型のものと同范でした。



扶余博物館前のモニュメントに鬼面文磚のコピー

## 鬼面文磚そして人面瓦

小躍りしたくなるほど感激したのは、外里遺蹟の松林から鬼形文の磚（せん）など8種の磚が発見されたとして、実物の展示（前回紹介）のほか、博物館前のモニュメントにも刻まれていたことでした。兵士が持つ盾のデザインにもなっていました。この鬼面文の磚は平城宮型鬼瓦のデザインのルーツ（原型）でしょう。

すてきな顔の人面瓦（説明札では鬼面）が魅力的でした。この地の弥勒寺（ミルクサ、600～640 創建）の跡から発掘されたといいます。鬼もいいが、人面もいい。



上・高麗鬼面文瓦当（扶余博物館）=私は人面文とするのが妥当だと思いますが。

下・百済青銅製鬼面裝飾（扶余博物館）

## 百濟最後の都・扶余

3日目は、百濟王朝文化を紹介する国立扶余博物館のセミナールームで、1時間の講義を受けました。百濟が繁栄していた時代は、日本の飛鳥時代です。天皇政権の要請に答えて、百濟は人も物も思想も、日本にもたらしました。仏教も仏像も寺も、そして瓦もです。天皇家も、百濟の血筋です。

学者・専門家のまとまった説明で学んだあと見学するのは、とてもいいものです。講義の中で、おまけの話もいただきました。「ワッソ（来た＝神が来た）」という言葉が日本のおみこし「ワッショイ」になったこと、竜の爪は中国は5本、韓国は4本、日本は3本と違いがあることなど。



扶余博物館前のモニュメント  
兵士の盾に鬼面文磚のデザイン

## 定林寺で 鬼瓦発見

扶余での有名なポイントは定林寺（チョンリンサ）で、石造の五重塔はどっしりとしていました。秀吉の軍の狼藉に耐えた



定林寺五重塔の前で妻と

のは、石造物だけだったのです。山門、講堂（復元）などに鬼瓦を見つけました。日本にはないデザインの鬼が宮南池抱龍亭にいました。こういう発見が、楽しくてたまらないのです。



定林寺講堂の鬼瓦。うしろは大きな鷗尾。



定林寺宮南池抱龍亭 鬼瓦

### 扶蘇山城に立派な鬼

扶余に泊まって、4日目は扶蘇山城を歩きました。泗泚楼（サザル）、泗泚門（サザムン）、三忠祠、迎日楼で鬼瓦を発見。妻はともかく、私のご機嫌でした。



扶蘇山城 泗泚門（サザムン） 鬼板



三忠祠全景と三忠祠の鬼瓦



前回の旅で「下見」してあった白馬江、皐蘭寺をまわって、全州（チョンジュ）へ。ここは校洞韓屋保存地区（1930ごろの家屋群）が有名です。

### 全州でも人面瓦の数々

5日目はまず国立全州歴史博物館に行きました。書物と解説展示が中心で遺物は少なく、鬼瓦もありませんでした。

しかし、展示されていた人面文瓦と対面しました。鬼もいいけど、人もすてきですね。ミルク山のうしろのシシ寺（益山師子寺）跡から1993年発掘したといいます。

人面文瓦（全州博物館）





人面文瓦（全州博物館）

李氏朝鮮の始祖・李成桂（イ・ソンゲ）の遺影を奉る慶基殿（キョンギジョン）を見学、近くの郷校の境内にある典祀庁のあまり古くない建物（「全州女性儒道会館」の看板もあり）に、巧みな櫛さばきの人面瓦が載っていました。こういう顔を刻むことができる人ってすごいと思いました。



全州 郷校内 典祀庁 人面瓦

昼食に本場のプルコギを味わい、午後は自由行動。茶店めぐりで韓国式の茶道を楽しみ、民芸品の店をひやかしました。夕食後は、韓国伝統舞踊を観ました。

### 海印寺にすてきな鬼瓦

6日目が最終日。八万大蔵教を収蔵する世界遺産・伽耶山海印寺（ヘインサ）を訪れました。

まず目に付いたのは、九光楼の屋根に堂々と構えている、珠をくわえた龍でした。

中国にも韓国にも、龍の瓦が多いのですが、海印寺の龍頭瓦のスッキリとしたデザインのみごとさには感銘をうけました。



海印寺  
九光楼  
竜

しかし、なんといっても最高の収穫は大寂光殿の屋根の隅々で天下を睥睨（へいげい）する鬼面瓦でした。

日本の成熟した鬼瓦のような立体的なつくりにはなっていませんし、頭の上の鳥衾（とりぶすま）がド太くてスマートではありませんが、まさに鬼面瓦のルーツと言えるのではないかと思います。



海印寺  
金堂・大寂光殿  
鬼瓦

釜山から成田へは一息。2週間後には、慶州への旅を予定していました。

（つづく）